

トピック

D

中学生・高校生の学校運動部活動の活動実態 — 新型コロナウイルス感染症の影響 —

笹川スポーツ財団 政策オフィサー

鈴木 貴大

スポーツ庁は現在、運動部活動改革に取り組んでおり、2018年3月に「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」、2020年9月に「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革」を策定し、生徒や教師にとって望ましいスポーツ環境の構築や学校と地域が協働・融合した部活動の具体的な実現方策を検討している。その中で、運動部活動の顧問を担う教師の長時間労働や指導経験のない教師への負担軽減のため、2023年度以降、休日の運動部活動の段階的な地域移行を図る方針を示し、各都道府県に拠点校を設置した上で実践研究をスタートしている。また、特に少子化の影響が大きい過疎地域における他校との合同部活動の推進やICTの活用、さらには学校の働き方改革の観点も踏まえた地方大会のあり方の整理、学校以外のチームも参加できるような大会の参加資格についての検討が進められるなど、中学生・高校生の運動部活動のあり方は大きな変換期を迎えている。

さらに、2020年1月にわが国で初めて新型コロナウイルス感染症（以下、「新型コロナウイルス」）への感染が確認されて以降、瞬く間に感染は全国に拡大し、中学校や高校においては、国からの一斉臨時休業が2020年3月から要請されるなど、今まで通りに運動・スポーツができない状況が続いた。休業要請が解除された後も大会の中止や運動部活動の活動休止要請など、満足な活動ができない状況は継続しており、収束の目途は立っていない。

そこで本稿では、まさしく青少年の運動・スポーツ活動がさまざまな変化を強いられている状況の中、新型コロナウイルスの感染拡大状況下である2021年6～7月に実施した本調査の結果から中学生と高校生を対象とし、運動部活動の実態を把握するとともに、新型コロナウイルスの感染拡大が運動部活動に与えた影響を検討した。

D-1 学校運動部活動の所属状況

表D-1は、中学生と高校生の学校運動部活動への所属状況について大勝（2019）のデータに2021年の調査結果を追加して示したものである。2021年をみると、中学生全体の所属率は61.8%と2019年と同率であった。高校生全体では43.8%であり、2017年48.1%、2019年45.4%と減少傾向が続いている。

性別にみると、2021年では中学生は男子74.0%、女

子49.8%であり、男子が女子を24.2ポイント上回っている。2017年は19.0ポイント、2019年は20.5ポイントと調査を重ねるごとに男女差は大きくなっている。また、女子の所属率は2017年の55.2%から減少傾向にある。高校生は男子53.8%、女子33.5%と男女いずれも中学生と比較して所属率は低く、男女差は20.3ポイントであった。特に、女子の所属率は2017年35.4%、2019年

36.0%と30%台が続いている。

学年別にみると、2021年では中学生は2年生の67.3%が最も高く、次いで1年生が63.5%、3年生54.9%であった。2019年と比較して1年生と3年生は減少傾向にあるが、2年生は増加傾向を示している。高校生は

1年生の52.8%が最も高く、次いで2年生が46.1%、3年生が33.1%と学年進行にともなって所属率は低下する。2019年と比較すると1年生は減少傾向にあり、所属率は8.3ポイント低下した。一方、2年生と3年生は増加傾向を示している。

【表D-1】学校運動部活動の所属状況の推移(中学生・高校生)

中 学 生										
		2017年			2019年			2021年		
		n	所属(%)	無所属(%)	n	所属(%)	無所属(%)	n	所属(%)	無所属(%)
全 体		537	65.7	34.3	565	61.8	38.2	503	61.8	38.2
性別	男 子	298	74.2	25.8	308	71.1	28.9	250	74.0	26.0
	女 子	239	55.2	44.8	257	50.6	49.4	253	49.8	50.2
学年	1 年生	183	69.9	30.1	189	64.6	35.4	159	63.5	36.5
	2 年生	187	66.8	33.2	195	56.9	43.1	171	67.3	32.7
	3 年生	167	59.9	40.1	181	64.1	35.9	173	54.9	45.1

高 校 生										
		2017年			2019年			2021年		
		n	所属(%)	無所属(%)	n	所属(%)	無所属(%)	n	所属(%)	無所属(%)
全 体		476	48.1	51.9	509	45.4	54.6	518	43.8	56.2
性別	男 子	239	60.7	39.3	262	54.2	45.8	264	53.8	46.2
	女 子	237	35.4	64.6	247	36.0	64.0	254	33.5	66.5
学年	1 年生	172	53.5	46.5	180	61.1	38.9	163	52.8	47.2
	2 年生	149	55.0	45.0	163	43.6	56.4	180	46.1	53.9
	3 年生以上	155	35.5	64.5	166	30.1	69.9	175	33.1	66.9

注) 大勝志津穂 (2019) 中学生・高校生の学校運動部活動の活動実態—ガイドライン制定後の変化—, 子ども・青少年のスポーツライフ・データ2019—4~21歳のスポーツライフに関する調査報告書—, 笹川スポーツ財団, p41より引用し一部改変

資料: 笹川スポーツ財団「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2021

D-2 中学生・高校生の学校運動部活動の状況の推移

表D-2には、中学生・高校生の運動部活動の週あたりの活動日数、平日の活動時間、休日の活動時間、土日の活動状況の推移を示した。大勝 (2019) がまとめた2017年、2019年のデータに2021年の結果を追加した。スポーツ庁の「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」では、適切な休養日、活動時間について以下の具体的な数値が示されている。

- ・学期中は、週当たり2日以上 of 休養日を設ける。(平日は少なくとも1日、土曜日及び日曜日 (以下、「週末」という) は少なくとも1日以上を休養日とする。
- ・1日の活動時間は、長くとも平日では2時間程度、学校の休業日 (学期中の週末を含む) は3時間程度とし、できるだけ短時間に、合理的でかつ効率的・効

果的な活動を行う。

この数値を基準に2017年からの活動状況の推移をみると、中学生の週あたりの活動日数は2021年では「5日」の42.4%が最も高く、「6日」23.8%、「4日」20.6%と続く。2019年と比較すると、週あたりの活動日数は「6日」の割合が10ポイント以上減少し、「3日」「4日」の割合はそれぞれ5ポイント以上増加した。また、土日の活動状況は「両日」が8.2ポイント減少し、「土日のどちらか」が5.9ポイント増加した。2017年では約半数が「両日」活動していたのに対し、2021年では14.1%に減少し「土日のどちらか」は8割程度まで増加した。

活動時間をみると、平日は「1~2時間」81.4%が最も高く、2019年より6.0ポイント増加し、「3~4時間」は

7.7ポイント減少した。休日は「3～4時間」が66.6%と最も高いものの、割合は2019年より6.8ポイント減少した。「1～2時間」は18.6%と2019年から10ポイント以上増加し、平日、休日ともに中学生の活動時間は減少している状況がうかがえる。

中学生の運動部活動の活動状況については、2019年の結果と比較して活動日数、時間ともに減少傾向を示し、ガイドラインに示された数値に準じた活動を行う学校の増加が示唆された。

高校生の活動状況をみると、2021年の週あたりの活動日数は「6日」41.0%が最も高く、2019年から5ポイント以上減少し「5日」の割合は10ポイント近く増加した。土日の活動状況は2017年、2019年は「両日」が約半数を占めていたが、2021年は36.1%と2019年から13.7ポイント減少し、「土日のどちらか」の割合は2019年から11.7ポイント増加した。高校生の活動日数は2017年から2021年にかけて減少傾向にあり、ガイドラインに示された「週当たり2日以上」の休養日を設ける」を実

【表D-2】 学校運動部の活動状況の推移(中学生・高校生)

	中 学 生				高 校 生			
	2017年(n=353)	2019年(n=349)	2021年(n=311)	差	2017年(n=229)	2019年(n=231)	2021年(n=227)	差
n(%)								
週あたりの活動日数								
1日	5 (1.4)	3 (0.9)	1 (0.3)		3 (1.3)		5 (2.2)	
2日	3 (0.8)	3 (0.9)	5 (1.6)		5 (2.2)	6 (2.6)	5 (2.2)	
3日	7 (2.0)	13 (3.7)	27 (8.7)	↑	6 (2.6)	14 (6.1)	19 (8.4)	
4日	20 (5.7)	38 (10.9)	64 (20.6)	↑	11 (4.8)	15 (6.5)	20 (8.8)	
5日	80 (22.7)	150 (43.0)	132 (42.4)		27 (11.8)	47 (20.3)	67 (29.5)	↑
6日	169 (47.9)	119 (34.1)	74 (23.8)	↓	117 (51.1)	111 (48.1)	93 (41.0)	↓
7日	67 (19.0)	22 (6.3)	3 (1.0)	↓	60 (26.2)	38 (16.5)	17 (7.5)	↓
N.A.	2 (0.6)	1 (0.3)	5 (1.6)				1 (0.4)	
平均 (日/週)	5.7 (±1.11)	5.2 (±1.01)	4.8 (±1.01)		5.8 (±1.21)	5.6 (±1.18)	5.2 (±1.29)	
平日の活動時間								
0時間	1 (0.3)				1 (0.4)			
1～2時間	244 (69.1)	263 (75.4)	253 (81.4)	↑	104 (45.4)	112 (48.5)	160 (70.5)	↑
3～4時間	103 (29.2)	83 (23.8)	50 (16.1)	↓	116 (50.7)	113 (48.9)	64 (28.2)	↓
5時間以上	2 (0.6)	1 (0.3)	1 (0.3)		7 (3.1)	5 (2.2)	3 (1.3)	
N.A.	3 (0.8)	2 (0.6)	7 (2.3)		1 (0.4)	1 (0.4)		
平均 (時間/1回)*	2.3 (±0.67)	2.2 (±0.67)	2.0 (±0.61)		2.7 (±0.91)	2.6 (±0.79)	2.3 (±0.73)	
休日の活動時間								
0時間	10 (2.8)	14 (4.0)			8 (3.5)	18 (7.8)		
1～2時間	44 (12.5)	23 (6.6)	58 (18.6)	↑	14 (6.1)	24 (10.4)	39 (17.2)	↑
3～4時間	203 (57.5)	256 (73.4)	207 (66.6)	↓	126 (55.0)	124 (53.7)	126 (55.5)	
5時間以上	80 (22.7)	49 (14.0)	16 (5.1)	↓	68 (29.7)	57 (24.7)	33 (14.5)	↓
N.A.	16 (4.5)	7 (2.0)	30 (9.6)		13 (5.7)	8 (3.5)	29 (12.8)	
平均 (時間/1回)*	3.9 (±1.79)	3.7 (±1.21)	3.1 (±0.94)		4.3 (±1.87)	4.3 (±2.07)	3.6 (±1.82)	
土日の活動状況								
両日	161 (45.6)	78 (22.3)	44 (14.1)	↓	123 (53.7)	115 (49.8)	82 (36.1)	↓
土日のどちらか	160 (45.3)	250 (71.6)	241 (77.5)	↑	80 (34.9)	93 (40.3)	118 (52.0)	↑
活動していない	19 (5.4)	17 (4.9)	19 (6.1)		15 (6.6)	21 (9.1)	25 (11.0)	
N.A.	13 (3.7)	4 (1.1)	7 (2.3)		11 (4.8)	2 (0.9)	2 (0.9)	

注1) 差 2021年-2019年

注2) ↑↓:10ポイント以上

注3) ↑↓:5ポイント以上

注4) 大勝志津穂 (2019) 中学生・高校生の学校運動部活動の活動実態-ガイドライン制定後の変化-, 子ども・青少年のスポーツライフ・データ2019-4～21歳のスポーツライフに関する調査報告書-, 笹川スポーツ財団, p42より引用し一部改変

*0時間を除く

■:そのカテゴリーで最も高い割合の項目

資料: 笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2021

践する学校の増加が示唆される。

活動時間をみると、平日では「1~2時間」が70.5%と最も高く2019年から22.0ポイント増加し、「3~4時間」は28.2%と2019年から20.7ポイントの減少がみられた。休日の活動時間は「5時間以上」が14.5%と2019年から10.2ポイント減少し、活動日数と同様に活

動時間も減少傾向を示しており、ガイドラインの数値に準じた活動を行う学校の増加が推察される。

中学生・高校生ともに活動日数や活動時間に減少傾向が確認されたが、2019年から2021年にかけての変化については、本調査を実施した時期を踏まえ新型コロナウイルスの影響も考慮する必要があるだろう。

D-3 学校運動部活動所属者に対する新型コロナウイルス感染拡大の影響

図D-1に学校運動部活動所属状況別にみた新型コロナウイルス感染拡大による運動時間や環境の変化の有無を示した。所属者をみると、何らかの変化があったと回答した者は中学生で75.5%、高校生で82.3%といずれも無所属より高く、新型コロナウイルスの感染拡大は、運動部活動に所属している中学生・高校生の運動時間や環境に大きな変化をもたらしたと考えられる。

表D-3に示した具体的な変化の内容をみると、中学生の所属者では「参加予定のスポーツ大会が延期・中止になったことがあった」が71.8%と最も高く、「学校の運動部やサークル、民間のスポーツクラブなどの活動が減ったことがあった」71.4%、「運動・スポーツ・運動あそびをする時間が減った」65.0%と続く。

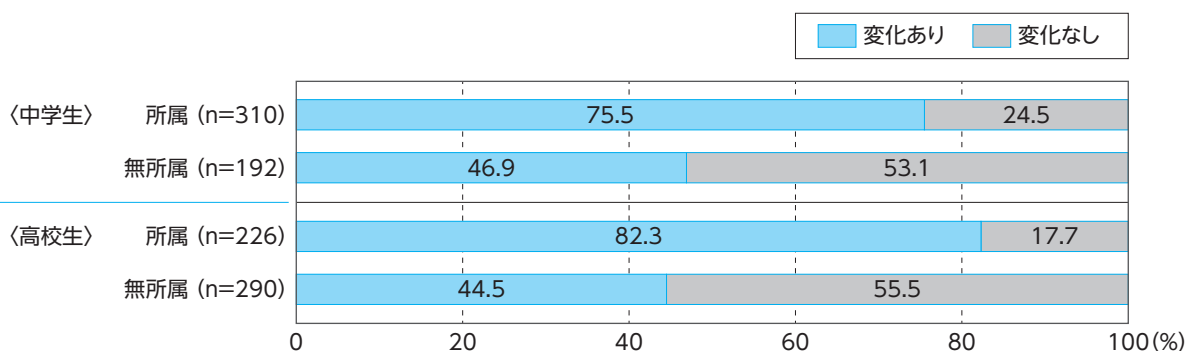
高校生の所属者は「学校の運動部やサークル、民間のスポーツクラブなどの活動が減ったことがあった」70.4%が最も高く、次いで「参加予定のスポーツ大会が延期・中止になったことがあった」69.9%、「校庭や体育館、スポーツ施設がいままでどおり使えなくなったことがあった」57.0%であった。

中学生・高校生ともに参加予定の大会の延期・中止、

部活動の活動時間の減少、施設の利用制限といった感染拡大防止対策により、運動・スポーツ実施が制限された状況がうかがえる。また、表D-2に示した中学生・高校生の学校運動部の活動状況の推移では、2019年と比べ2021年の活動日数、時間ともに減少傾向を示している。ガイドラインに則り活動時間の短縮や休日に休養日を設定した運動部活動の増加も要因のひとつと考えられるが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、活動を制限せざるを得ない状況もこの結果に反映されたと推測できる。

表D-4には学校運動部活動所属者の新型コロナウイルス感染拡大後の運動・スポーツに対する気持ちの変化を示した。中学生の所属者では「友達やチームの仲間と一緒に運動できることがうれしいと思うようになった」38.3%が最も高く、「運動・スポーツ・運動あそびをすることは大切だと思うようになった」37.3%、「運動・スポーツ・運動あそびができることにありがたみを感じるようになった」35.4%と続く。

高校生の所属者では「友達やチームの仲間と一緒に運動できることがうれしいと思うようになった」「運動・



【図D-1】 学校運動部活動所属状況別にみた新型コロナウイルス感染拡大による運動時間や環境の変化

資料：笹川スポーツ財団「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2021

スポーツ・運動あそびができることにありがたみを感じようになった」が同率で30.2%と最も高く、「運動・スポーツ・運動あそびをすることは大切だと思うようになった」が25.3%で続く。

運動部活動所属者においては、中学生・高校生ともに気持ちの変化として上位にあがる項目は、運動・スポーツができることに対するポジティブな変化であった。

新型コロナウイルス感染拡大により活動の休止を余儀

【表D-3】 新型コロナウイルス感染拡大による運動時間や環境の変化(運動部活動所属状況別)

(%)

順位	中 学 生			高 校 生		
		所属 (n=234)	無所属 (n=90)		所属 (n=186)	無所属 (n=129)
1	参加予定のスポーツ大会が延期・中止になったことがあった	71.8	46.7	学校の運動部やサークル、民間のスポーツクラブなどの活動が減ったことがあった	70.4	35.7
2	学校の運動部やサークル、民間のスポーツクラブなどの活動が減ったことがあった	71.4	44.4	参加予定のスポーツ大会が延期・中止になったことがあった	69.9	44.2
3	運動・スポーツ・運動あそびをする時間が減った	65.0	58.9	校庭や体育館、スポーツ施設がいままでどおり使えなくなったことがあった	57.0	48.8
4	校庭や体育館、スポーツ施設がいままでどおり使えなくなったことがあった	61.1	46.7	運動・スポーツ・運動あそびをする時間が減った	50.0	48.1
5	公園や広場が閉鎖されたことがあった	12.4	20.0	公園や広場が閉鎖されたことがあった	10.2	8.5
6	学校やスポーツ施設で貸し出しているボールなどの用具が使えなくなったことがあった	12.0	13.3	学校やスポーツ施設で貸し出しているボールなどの用具が使えなくなったことがあった	8.6	7.8
7	運動部活動などの活動方法について仲間やチームメンバーと話し合う機会が増えた	7.7	11.1	運動部活動などの活動方法について仲間やチームメンバーと話し合う機会が増えた	7.5	2.3
8	運動・スポーツ・運動あそびをする時間が増えた	4.7	13.3	オンラインを活用して運動・スポーツ・運動あそびをすることが増えた	2.7	4.7
9	オンラインを活用して運動・スポーツ・運動あそびをすることが増えた	3.8	14.4	運動・スポーツ・運動あそびをする時間が増えた	2.2	9.3

資料：笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2021

【表D-4】 新型コロナウイルス感染拡大による運動・スポーツに対する気持ちの変化(運動部活動所属状況別)

(%)

順位	中 学 生			高 校 生		
		所属 (n=308)	無所属 (n=192)		所属 (n=225)	無所属 (n=289)
1	友達やチームの仲間と一緒に運動できることがうれしいと思うようになった	38.3	18.8	友達やチームの仲間と一緒に運動できることがうれしいと思うようになった	30.2	14.2
2	運動・スポーツ・運動あそびをすることは大切だと思うようになった	37.3	22.4	運動・スポーツ・運動あそびができることにありがたみを感じるようになった	30.2	12.8
3	運動・スポーツ・運動あそびができることにありがたみを感じるようになった	35.4	15.1	運動・スポーツ・運動あそびをすることは大切だと思うようになった	25.3	20.8
4	運動・スポーツをしていても感染しないか気になるようになった	31.8	18.2	運動・スポーツをしていても感染しないか気になるようになった	23.1	13.1
5	練習や試合の回数が減り、やりがいを感じてしまった	17.2	6.8	練習や試合の回数が減り、やりがいを感じてしまった	20.9	4.8
6	活動中に肩を組んだり握手にとまどいを感じるようになった	15.9	9.4	活動中に肩を組んだり握手にとまどいを感じるようになった	9.8	8.7
7	運動・スポーツ・運動あそびはしなくてもよいと感じるようになった	1.9	3.6	運動・スポーツ・運動あそびはしなくてもよいと感じるようになった	0.9	2.8
8	特に変化はなかった	26.9	56.3	特に変化はなかった	32.9	55.4

資料：笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2021

なくされた時期を経て、改めて仲間と一緒に運動ができる喜びや、運動・スポーツの大切さを認識したことが確認できる。一方「運動・スポーツをしていても感染しないか気になるようになった」（中学生31.8%、高校生23.1%）や「練習や試合の回数が減り、やりがいをなくしてしまった」（中学生17.2%、高校生20.9%）などネガティブな気持ちを示す項目の回答もあり、無所属の者よりも高い割合を示した。新型コロナウイルス感染への不安を抱えながら運動・スポーツに取り組む姿や、練習や試合の制限によってモチベーションが低下する様子がみとれる。

このように、新型コロナウイルス感染拡大が運動部活動所属者へ与えた影響として、部活動の活動時間や施設利用の制限、大会の延期・中止を余儀なくされた状況、

運動・スポーツに対する気持ちの変化が確認された。2020年の全国中学校体育大会や全国高等学校総合体育大会（インターハイ）、第76回国民体育大会（三重とこわか国体）、第76回国民体育大会冬季大会スキー競技会（美の国あきた鹿角国体）の中止、それに伴う予選大会の中止など多くの大会が新型コロナウイルスの影響により開催を断念した。また、感染の波が大きくなるたびに、地域によっては自治体からの部活動の活動休止要請があるなど、十分に活動できない状況は続いている。未だに収束の目途が立っていない状況下において、中学生・高校生が運動・スポーツを安全に実施できるよう、感染拡大に留意しつつ、大会の開催方法や日々の練習環境などを整えることが重要になるだろう。

D-4 まとめ

本稿では中学生と高校生の運動部活動についてガイドライン制定前の2017年、制定後の2019年、2021年の活動状況を把握するとともに、新型コロナウイルス感染拡大が運動部活動に与えた影響について検討した。

中学生では週あたりの活動日数において「6日」の割合が減少し、5日以内が7割以上となった。土日の活動状況は「両日」の割合が減少し、「土日のどちらか」「活動していない」の合計が8割を超えた。高校生では土日の活動状況は「両日」の割合が減少したほか、平日と休日の活動時間が減少するなど、中学生・高校生ともにガイドラインに示された数値の範囲内で活動する運動部活動の増加が明らかとなった。

しかしながら、本調査における運動部活動の活動日数や時間の変化は必ずしもガイドライン制定による効果に限ったものではなく、新型コロナウイルス感染拡大の影響も大きいと考えられる。中学生・高校生ともに運動部活動所属者の7～8割が感染拡大後の運動時間や環境に変化があったと回答し、具体的には活動頻度の減少や参加予定の大会の延期・中止などが上位にあがった。大

会中止や日々の練習の制限、活動そのものの休止など新型コロナウイルス感染拡大によって、運動部活動の実施環境は大きな変化を強いられ、活動日数や時間の減少につながったと考えられる。

また、気持ちの変化においては運動部活動所属者にポジティブな気持ちの変化が多くみられたものの、ネガティブな気持ちの変化も一定数確認された。新型コロナウイルスの感染拡大は運動部活動の実施環境に限らず精神面にも影響を与えたといえよう。

2023年度以降、休日の運動部活動は段階的に地域へ移行される方針がスポーツ庁によって示され、今後、運動部活動のあり方はさらなる変化が予測される。地域の受け皿の問題や教師への負担、新型コロナウイルスへの対策を講じながらの活動など課題は山積しているが、運動部活動が生徒たちにとって生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するための基盤となるよう、当事者である中学生・高校生の意向もくみ取った運動部活動改革が求められる。

参考文献

大勝志津穂（2019）中学生・高校生の学校運動部活動の活動実態ーガイドライン制定後の変化ー，子ども・青少年のスポーツライフ・データ2019ー4～21歳のスポーツライフに関する調査報告書ー，笹川スポーツ財団，pp40-46

スポーツ庁（2018）運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン

スポーツ庁（2020）学校の働き方改革を踏まえた部活動改革

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/detail/1406073_00003.htm